

前思春期女子の chum 形成が自我発達に及ぼす影響

——展望法と回顧法を用いて——

長 尾 博¹

THE EFFECTS OF CHUM FORMATION IN PREADOLESCENCE ON WOMEN'S EGO DEVELOPMENT

——By means of both prospective and retrospective methods——

Hiroshi NAGAO

The purpose of the present study was to examine the effects of chum formation in preadolescence on women's ego development. 76 girls in the sixth grade as subjects have been tested using methods such as the Mannarino's chumchecklist, the author's intimacy motive scale, and the prospective adolescent crisis state scale. In addition, 93 senior high school girls, have completed the retrospective preadolescent chumchecklist and the adolescent crisis state scale (Nagao 1989). And also, 63 middle-aged women had been asked to answer questions based upon the middle-aged crisis scale (Nagao 1990), the retrospective adolescent crisis state scale, and the retrospective preadolescent chumchecklist. The main results were as follows: (1) The existence of chum in preadolescence had a stronger effect on the future ego development than the degree of the intimacy motive, and also (2) had more influence on the adolescent crisis state than on the middle-aged crisis state. (3) The former crisis state was connected with the latter crisis state and (4) the degree of the adolescent crisis state prospected by the preadolescent girls was stronger than that retrospected by the middle-aged women.

Key words : chum, intimacy motive, preadolescence, adolescent crisis state, middle-aged crisis state.

問 題

本研究は、前思春期女子の chum 形成が青年期の自我発達上の危機状態、及び中年期の危機状態に及ぼす影響を明らかにするものである。

生涯発達に関する代表的な臨床心理学的理論として、Erikson (1959) による人生周期 (lifecycle) に即した漸成的理論 (epigenetic theory) と Sullivan (1953) による対人

関係論 (interpersonal theory) があげられる。Sullivan (1953) は、小学 1 年生時より小学 3 年生時までを少年少女期 (juvenile) とし、この時期を遊び友だちを求め、友だちと競争・妥協し合い、give and take のいわば利己的社会化の始まる時期ととらえた。この時期の後、小学校 4 年生時より小学校 6 年生時までを前思春期 (preadolescence) とし、この前思春期に同性の親密な友人である chum を形成し、この chum に幸福、充足感、自信を与えたい欲求が生じて chum との価値内容の相互確認を行って真の社会化が始まるととらえている。Sullivan (1953) は前思春期のこのような chum との関

¹ 活水女子大学文学部 (Department of Literature, Kwassui Women's College)

係のあり方を協同 (collaboration) と呼び、この協同によってそれ以前の児童の自我の発達上の障害が修復できるとも述べている。逆に前思春期において孤独体験を重ねることは、以後の人生において自我発達上の障害をまねきやすいとも述べている。筆者の臨床経験においても、自我発達上の障害や問題をもつクライアントの生育史を明らかにしていくと、前思春期において chum 形成がなされていないケースが多く見られた(長尾, 1987)。このようなことから、前思春期の chum 形成という視点から実証的に以後の自我発達をとらえていくことは意義あることと思われる。Sullivan のいう chum 形成が及ぼす前思春期以後の自我発達上の影響に関しては、chum の存在そのものが影響を及ぼしているのか、それとも chum 形成上の児童の親密動機 (intimacy motive) の内容や程度が影響を及ぼしているのかは明らかではない。McAdams (1980) は、親密動機と親和動機 (affiliation motive) とを区別している。前者は他者との情緒的結合に関して受動的で、他者を統制しようとししない動機であるが、後者は他者から拒否されることへの不安が根底に内包しており、積極的で行動的な動機であると定義している (McAdams & Constantian, 1983)。

ところで Erikson (1959) の漸成的理論によれば、とくに青年期 (adolescence) と中年期 (middle age) とは自我発達上の大きな分岐点であるとされ、Sullivan の強調した前思春期とともに発達上で注目すべき時期ととらえられる。長い人生において、前思春期と青年期、前思春期と中年期、青年期と中年期のそれぞれは自我発達や社会適応に関してどのような関連をもっているのだろうか。

まず前思春期と青年期との関係に関しては、Gjerde & Block (1991) による11歳時の遊戯内容の分析結果から、男子の場合、衝動の統制力の欠如した遊びを、女子の場合、道徳的テーマをふくむ遊びや失うことをテーマとする遊びを示す児童は18歳時において抑うつ感が強いことが報告されている。また、Bolognini, et al. (1989) によれば女子のほうが男子よりも9歳時の精神的健康度 (mental health) は、20歳時まで影響を及ぼすことが報告されている。しかし、わが国では前思春期と青年期の自我発達や社会適応に関する関係を取りあげた実証的研究はない。

また、前思春期と中年期との関係に関しては、Hightower (1990) の13歳時と50歳時の縦断的研究によれば、両時期の対人関係パターンや精神的健康度は、正の相関があることが明らかにされている。また Deutsch

(1944) によれば、依存することなく自律した前思春期 (autonomous preadolescence) を過ごした女子は、青年期以後も退行 (regression) することなく自律した人生を過ごすという知見をあげている。わが国では前思春期と中年期の自我発達や社会適応に関する関係を取りあげた実証的研究もなく、この Deutsch による知見がわが国の女性にも適用できるのかどうかを検討していく必要がある。

さらに青年期と中年期との関係に関しては、Vailant & Milofsky (1980) による男性を対象とした大学生時と47歳時との縦断的研究によれば、大学生時において自我が未発達の場合は、47歳時においても年齢相応の自我が発達していないという Erikson の漸成的理論が検証されている。しかし、女性を対象としたこのような研究はない。また、King (1980) も男女とも中年期の葛藤が、青年期の葛藤の再現をまねくことを指摘している。わが国では、岡本 (1985) が中年期の男女を対象にした研究において、中年期特有の外的・心理的变化を契機に青年期に確立すべき自我同一性 (ego identity) の問い直しが起こりやすいことを報告している。しかし、青年期における自我同一性の確立というテーマ以外の親子関係上の独立と依存のアンビバレンスや不適応状態が中年期までどのように影響を及ぼしているのかを明らかにした研究はない。とくに女性を対象として自我発達や社会適応に関する青年期と中年期との関連をとらえることは、柏木 (1972) や村山 (1987) が強調しているように現代の女性役割の価値観が多様化しているという観点から意義あることと思われる。

また、従来から青年心理学では青年自身を対象とした研究がほとんどであり、青年期を迎える前の児童が青年期をどのように認知しているのか、また青年期を終えた成人が青年期をどのように認知しているのかを明らかにし青年期を論じた研究はない。このような視点から青年期をとらえ直すことは、自我発達上で前思春期の重要性を明らかにしていく意味から意義あることと思われる。

本研究の目的は、以下の5点である。展望法 (prospective method) と回顧法 (retrospective method) によって、(1)前思春期女子の chum の有無と青年期の自我発達上の危機状態との関係を明らかにする。また、展望法によって、(2)前思春期女子の親密動機の内容や程度と青年期の自我発達上の危機状態との関連を明らかにする。さらに、回顧法によって、(3)前思春期女子の chum の有無と中年期の危機状態²との関連を明らかにする。(4) 青年期女子の自我発達上の危機状態と中年期の危機状

態との関連を明らかにする。(5)前思春期の自我発達上の重要性を明らかにするために、青年期の自我発達上の危機状態に関して、前思春期の女子が展望した内容と中年期女性が回顧した内容との違いについてを明らかにする。

方 法

手続 小学6年生女子生徒に対しては、(1)前思春期のchumchecklist、(2)親密動機尺度、(3)青年期(高校生時)³を展望した危機状態尺度の3つを実施した。Sullivan (1953) のいうchumの有無をとらえるために、Mannarino (1976) がSullivan 理論にもとづいて作成したchumchecklist に筆者が日本の児童にふさわしいように修正を加えたものを3つの小学校の女子生徒に質問紙で実施した(TABLE 1)。この尺度は、17項目からなり、質問項目に該当する友人がいる場合を1点、いない場合を0点として得点化した。また、親密動機の内容と程度をとらえるために、McAdams (1980) が大学生を対象にTATを用いて分析した親密動機内容をもとに筆者が19の質問項目を作成し、3つの小学校の女子生徒に質問紙で実施した。この尺度は、「非常に強い」の4点から「まったくない」の1点までの4件法で得点化した。また、長尾 (1989) の青年期の自我発達上の危機状態尺度をもとにA水準(問題内省水準; 青年期の自我同一性の混乱度や親子関係上の独立と依存の葛藤の程度を問う内容)とB水準(問題自覚水準; 不適応の程度を問う内容)の各7つの下位項目尺度のうちからそれぞれ2つの質問項目、合計28の質問項目を選び、それに対して「あなたの高校時代はどのような状態でしょう。高校時代にどうなっているかを展望して答えてください」と教示し、3つの小学校の女子生徒に実施した。この尺度は、「きっとそうだろう」の3点から「ちがうと思う」の1点までの3件法で得点化した。また、中学、高校、大学生女子に対しては、長尾 (1989) の青年期の

TABLE 1 Chumchecklist

- あなたの今の身のまわりに次のような友だちはいますか。
- 1 修学旅行のバスの中でとなりの席にすわりたい友だちがいる。
 - 2 おとなになったら何になりたいと話し合える友だちがいる。
 - 3 自分の家に来てとまる友だちがいる。
 - 4 朝、いっしょに登校する友だちがいる。
 - 5 かわるがわるリーダーとなるようなゲームをいっしょにする友だちがいる。
 - 6 勉強がおくれたら助けてあげたい友だちがいる。
 - 7 夏休みなどにいっしょに旅行や遠くへ行きたい友だちがいる。
 - 8 ドッジボールやソフトボールなどいっしょに遊べる友だちがいる。
 - 9 異性のことをおたがいに話す友だちがいる。
 - 10 自分とほとんど好みがいっしょの友だちがいる。
 - 11 おたがいの親のことを話せる友だちがいる。
 - 12 宿題のことで家へ電話し合う友だちがいる。
 - 13 たとえばゲームがじょうずでなくても敵方ではなく同じチームにしたい友だちがいる。
 - 14 誰にもいえない秘密をおたがいに知っている友だちがいる。
 - 15 いっしょにビデオを見たり、ファミコンをする友だちがいる。
 - 16 悪いことをしていたら、そのことが悪いことだと指摘したい友だちがいる。
 - 17 誰かにいじめられていたら助けてやりたい友だちがいる。

自我発達上の危機状態尺度で現在を問い、既述したchumchecklist から10項目を選出し、「あなたの小学校6年生時に次のような友人がいましたか」と教示した質問紙を実施した。後者の尺度は、該当する友人がいた場合を3点、わからない場合を2点、いなかった場合を1点として得点化した。また、中年期女性に対しては、長尾 (1990) による中年期危機状態尺度の女性用と中学、高校、大学生に用いた小学6年生時を回顧させたchumchecklist、および小学6年生女子に用いた青年期の自我発達上の危機状態尺度の質問項目を過去形に変えて、「あなたの高校時代はどうでしたか。思い出して次の質問に答えてください」と教示した質問紙を実施した。後者の尺度は、「そうだったと思う」の3点から「そんなことはなかったと思う」の1点までの3件法で得点化した。

調査対象 長崎県内の公立小学校6年生女子76名(県北部のA小学校19名、県中部のB小学校42名、県南部のC小学校15名)、長崎県内の私立女子中学校1年生58名、私立女子高校2年生93名、私立女子短期大学2年生15名、長崎県のボランティア活動を行う中年期女性⁴63名

² 長尾 (1990) は、中年期を40歳から59歳までの年齢幅でとらえ、中年期の危機状態を身体や社会的役割などの外的変化とともに自らの体力や諸能力の限界の認識と自己拡散欲求との葛藤が生じ始め、それまでの自分の生き方の後悔や反省の執着や一時的に時間的展望が希薄になることと定義した。また、この定義にもとづく尺度を作成している。この尺度の女性用は7つの下位項目尺度からなり、42項目で構成され、42点から126点までの得点幅となっている。

³ 長尾 (1989) の青年期の自我発達上の危機状態尺度を用いた学年差の検定結果、高校生の場合が危機状態A水準得点をもっとも高かった。そこで本研究では青年期を高校時ととらえることにした。

(40歳から59歳までで平均年齢46.75歳, 専業主婦18名と有職者45名)

調査時期 小学生に対しては1995年6月に各校クラスごとに一斉に実施した。中学, 高校, 大学生に対しては1995年7月と9月に各校クラスごとに一斉に実施した。中年期女性に対しては1995年11月に集会所で一斉に実施した。

結果と考察

本研究の各尺度の平均値はTABLE 2のとおりであった。この結果を本研究の目的に即して4つの側面から考察していきたい。

(1)前思春期からとらえた青年期の自我発達上の危機状態

TABLE 2の小学生の結果⁵をもとに前思春期のchumの有無と親密動機の強さの程度が, 高校時を展望

TABLE 2 各尺度の平均値

対象 尺度		A小学生	B小学生	C小学生	中学生	高校生	大学生	中年期女性
chumchecklist		14.79 (1.72)	12.00 (3.72)	12.47 (2.42)	26.68 (2.93)	24.37 (4.19)	24.67 (3.81)	24.22 (3.93)
青年期の自我 発達上の危機 状態尺度	A水準	25.51 (4.54)	25.49 (4.91)	25.60 (4.40)	75.28 (11.64)	81.55 (12.49)	75.87 (15.82)	25.48 (5.14)
	B水準	24.31 (5.03)	24.20 (5.11)	24.23 (5.92)	40.45 (9.31)	41.59 (7.89)	37.53 (8.58)	20.19 (4.49)
	総得点	49.50 (8.53)	49.71 (8.42)	50.01 (8.49)	115.71 (17.64)	123.02 (17.39)	113.40 (23.18)	45.70 (8.55)
親密動機尺度		58.65 (7.98)	55.60 (9.09)	57.93 (7.53)				
中年期危機 状態尺度								専業主婦群 70.83(8.05) 有職者群 55.29(9.38) 総 計 59.73(11.41)

注: () 内の数値は標準偏差値を示す。

A小学校は, 住民の移動の激しい地域にあり, 比較的に大きい規模の学校である。

B小学校は, 人口の少ない地域にあり, 比較的に小さい規模の学校である。

C小学校は, 漁村で人口の少ない地域にあり, 1クラス当たり10人の生徒の学校である。

⁴ ボランティア活動の課題遂行の度合いや参加動機については, 筆者も直接関わっていることから有職者のほうが専業主婦よりも高いととらえられた。また, その階層は比較的中産階層以上の者が多い。

⁵ 親密動機得点に関しては, 3つの小学校間に得点差はなかったが, chumchecklist得点に関しては, 県北部のA小学校の生徒の得点は, 他の2校の生徒の得点よりも高かった(A小学校とB小学校; $t=3.11$, $df=59$, $p<.01$, A小学校とC小学校; $t=3.28$, $df=32$, $p<.01$)。

した自我発達上の危機状態にどのように影響を及ぼしているかをとらえるために, 高校時を展望した自我発達上の危機状態尺度を基準変数として, chumchecklist得点, 親密動機得点をそれぞれ予測変数とした重相関係数, および偏相関係数を算出した(TABLE 3)。TABLE 3に示す高校時を展望した自我発達上の危機状態尺度のそれぞれの重相関係数が高いことから, 前思春期chumの有無と親密動機の強さの程度は高校時を展望した自我発達上の危機状態を予測するための意義ある要因であることがとらえられた。また, 偏相関係数を見ていくとchumの有無のほうが親密動機の強さの程度よりも高校時を展望した自我発達上の危機状態を予測する強い要因であることがわかる。

次に前思春期の親密動機の内容や強さの程度と高校時を展望した自我発達上の危機状態との関連をとらえてみたい。親密動機尺度構成に当たっては, 主因子法による因子分析を行い, さらにバリマックス回転を行った(TABLE 4)。各因子の命名は, McAdams (1980)の親密動機論に即して行った。尺度の信頼性をとらえるために, 3週間後に再検査を行ったところ, .78の相関値が示された。また尺度の内的一貫性をとらえるために, スピアマン—ブラウンの公式を用いて折半法で信頼係数を算出したところ, .85の高い値が得られた。また, chumchecklist得点との相関値を算出したところ, $r=.37$ ($p<.01$)を示し, 尺度の妥当性が確認された。この親密動機得点と高校時を展望した自我発達上の危機状態得点との相関値を算出したところ, 双方の得点間に有意な相関がないことが認められた(A水準得点と親密動機得点; $r=.04$, n.s, B水準得点と親密動機得点; $r=.01$, n.s, 危機状態総得点と親密動機得点; $r=-.01$, n.s)。このことから, 前思春期の親密動機の強さの程度は, 青年期の自我発達上の危機状態に強い影響を与えないことが明らかにされた。

しかし, 親密動機内容と高校時を展望した自我発達

TABLE 3 高校時を展望した自我発達上の危機状態得点を基準変数とした重相関係数と偏相関係数

基準変数 予測変数	A水準得点	B水準得点	危機状態総得点
chumchecklist得点	-.23*	-.24*	-.25*
親密動機得点	.13	.09	.09
重相関係数	.24*	.24*	.25*

*... $p<.05$

TABLE 4 親密動機尺度の因子分析結果

因子名	項目内容	1	2	3	4	5	6	7	8	h^2
対 話 dialogue	7何でも話せる友だちがほしい	.70	-.08	.35	.27	.17	-.12	-.17	.19	.80
	8相談できる友だちがほしい	.84	.18	.01	.06	.08	.02	-.20	.05	.79
	1つき合って安心できる友だちがほしい	.71	.12	.21	.16	-.01	.09	.05	.10	.62
	9つき合って自分も成長できる友だちがほしい	.59	.14	.16	.27	-.03	.29	.17	-.06	.59
	15つき合って楽しい友だちがほしい	.53	-.01	.49	.03	.31	-.20	.23	.07	.72
譲 渡 surrender	6運命的な出会いを感じるぐらいの友だちがほしい	.24	.83	.12	.14	.09	.11	.12	.04	.82
	14神様がめぐり合わせてくれた友だちがほしい	.13	.85	.19	.13	.18	.11	-.06	-.03	.85
	19その友だちと私とで起こった出来事は運命だったと感じるぐらいの友だちがほしい	-.08	.61	-.05	.21	.53	.13	-.02	.11	.73
継 続 continuance	17別れても手紙や電話で交流できる友だちがほしい	.19	.28	.84	.02	.05	.14	-.13	.06	.86
	11転校してもまだ交流できる友だちがほしい	.32	.05	.76	.16	.13	.27	-.06	-.06	.80
関 心 concern	3たがいにばげまし合える友だちがほしい	.26	.11	-.01	.78	.20	.08	-.03	-.12	.76
	4その友だちのことを私はいつも関心をもちたい	.27	.21	.09	.71	.20	.09	-.03	.19	.73
	16その友だちの話を何でも聞いてあげたい	-.01	.34	.40	.60	.05	-.19	-.19	.33	.82
調 和 harmony	13私と似たファッションをする友だちがほしい	.18	.09	.11	.12	.72	.17	.19	.02	.64
	18私の考えと似ている友だちがほしい	.02	.21	.09	.15	.79	.01	-.09	.06	.72
同 盟 union	5私の親と友だちの親とが交流のある友だちがよい	.01	.21	.09	-.06	.21	.84	-.07	-.01	.83
	12友だちのきょうだいとも私が交流のある友だちがよい	.14	.01	.28	.36	-.05	.57	.21	.18	.64
道 具 instrument	2わかり合える友だちよりも何かもらったり、宿題を教えてもらう便利な友だちがほしい	-.07	.02	-.11	-.08	.06	.02	.92	.03	.87
犠 牲 sacrifice	10ある程度、その友だちのためならいやなことでもやれる友だちがほしい	.16	.03	.02	.07	.09	.06	.05	.94	.92

上の危機状態との関連をとらえるために、TABLE 4 に示した親密動機尺度の各因子得点と高校時を展望した自我発達上の危機状態尺度の各下位項目得点との相関値を算出したところ、多くの有意な相関値が認められた (TABLE 5)。TABLE 5より親密動機の「譲渡」項目

TABLE 5 高校時を展望した危機状態得点と親密動機得点との相関値

親密動機尺度 危機状態尺度	対話	譲渡	継続	関心	調和	同盟	道具	犠牲
決断力欠如	.24*	.16	.15	.16	.19	-.07	.16	-.02
同一性拡散	-.16	.08	-.09	-.06	.01	.20	.19	.18
自己収縮	-.15	-.06	.03	-.20	-.19	-.03	.01	-.10
自己開示対象の欠如	-.04	-.04	-.09	-.21	.02	-.02	.27*	-.04
実行力欠如	-.32**	-.04	-.24*	-.20	-.14	.05	.41**	-.01
親とのアンビバレン ト感情	-.04	.04	-.11	-.06	.01	-.11	.32**	.13
親からの独立と依存 のアンビバレンス	.07	.14	.09	-.10	.02	.26*	-.01	-.10
緊張とその状況の回 避	-.05	.17	-.17	-.06	-.01	.02	.34**	.02
精神衰弱	-.09	.09	-.13	-.18	-.18	.05	.24*	.12
身体的痛み	.01	.24*	-.01	-.01	-.04	-.06	.16	.12
希な体験や精神身体 的反応	-.19	.06	-.02	-.03	-.11	-.05	.12	.09
閉じこもり	-.11	.01	-.16	-.16	-.16	-.22	.23*	-.03
身体的疲労感	.04	.24*	-.06	-.06	-.03	.14	.33**	.02
対人的過敏性	.04	-.01	-.01	-.09	.10	.05	.23*	-.09

*... $p < .05$ **... $p < .01$

は、危機状態の「身体的痛み」と「身体的疲労感」項目とに正の相関を示していることから、運命的出会いを求める前思春期女子は、身体的不調の多い青年期を迎えるのではないかという不安が強いことが明らかにされた。また、親密動機の「道具」項目は、危機状態尺度の多くの下位項目と正の相関を示していることから、自分にとって都合の良い友人を求める前思春期女子は、過敏で心の動揺の激しい青年期を迎えるのではないかという不安が強いことが明らかにされた。

さらに TABLE 2 の小学生の結果をもとに前思春期の chumchecklist 得点と高校時を展望した自我発達上の危機状態得点との関連をとらえたい。双方の得点間の相関値を算出したところ、chumchecklist 得点は危機状態 B 水準得点と危機状態総得点とに有意な負の相関が認められた (A 水準得点と chumchecklist 得点 ; $r = -.20$, n.s, B 水準得点と chumchecklist 得点 ; $r = -.23$, $p < .05$, 総得点と chumchecklist 得点 ; $r = -.23$, $p < .05$)。このことから、前思春期の chum の有無は青年期の自我発達上の危機

状態、とくに適応状態に影響を及ぼすのではないかと
いうことが推察された。また, chumchecklist 得点と危
機状態各下位項目得点との相関値を算出したところ、
chumchecklist 得点はA水準尺度の「自己収縮」得点
($r=-.28, p<.01$)と「自己開示対象の欠如」得点($r=-.27,$
 $p<.01$)とに負の相関を示し、B水準尺度の「精神衰弱」
得点($r=-.30, p<.01$)と「閉じこもり」得点($r=-.28, p<.01$)
とに負の相関を示した。このことから、前思春期に
chum のいない女子は、青年期を迎えるに当たって自
信がなく、心を開いて話せる友人ができないのでは
ないかという不安や、悩みやすく閉じこもった高校生時
代を過ごすのではないかという不安が強いことが明ら
かにされた。

(2)青年期からとらえた前思春期の chum 形成と青年 期の自我発達上の危機状態との関係

青年期からとらえた前思春期の有無と現在の自我発
達上の危機状態との関係を見るために、中学、高校、
大学の学年ごとに小学6年生時を回顧した chum-
checklist 得点⁶と青年期の自我発達上の危機状態得点
との相関値を算出した。その結果、中学生の場合では
危機状態総得点と chumchecklist 得点; $r=-.13, n.s,$
A水準得点と chumchecklist 得点; $r=-.24, p<.10,$
B水準得点と chumchecklist 得点; $r=.06, n.s,$ であ
り、高校生の場合では危機状態総得点と chumcheck-
list 得点; $r=-.34, p<.01,$ A水準得点と chumcheck-
list 得点; $r=-.40, p<.01,$ B水準得点と chumcheck-
list 得点; $r=-.14, n.s$ であり、大学生の場合では危機
状態総得点と chumchecklist 得点; $r=-.11, n.s,$ A水
準得点と chumchecklist 得点; $r=-.13, n.s,$ B水準得
点と chumchecklist 得点; $r=-.04, n.s$ であった。こ
のことから、高校生女子の場合において、青年期の親
子関係上の葛藤や自我同一性確立の葛藤(A水準得点)の
程度は、小学校6年生時の chum の有無と強い関連が
あることが明らかにされた。

そこで高校生女子の場合の小学6年生時を回顧した
chumchecklist 得点と青年期の自我発達上の危機状態
各下位項目得点との相関値を算出した (TABLE 6)。
TABLE 6 の結果と既述した小学生を対象とした
chumchecklist 得点と高校時を展望した自我発達上の
危機状態各下位項目得点との相関値とを比較すると、
危機状態尺度の「自己収縮」と「自己開示対象の欠如」

TABLE 6 chumchecklist 得点と危機状態下位項目
得点との相関値 (高校生女子)

決 断 力 欠 如	同 一 性 拡 散	自 己 収 縮	自己開 示対象 の欠如	実 行 力 欠 如	感 受 性 の アン ビ バ レ ン ス	親 から の 独立 と依 存の アン ビ バ レ ン ス	緊 張と その 状況 の回 避	精 神 衰 弱	身 体 的 痛 み	身 体 的 反 応	希 な 体 験 や 精 神 ・	閉 じ こ も り	身 体 的 疲 勞 感	対 人 的 過 敏 性
-.28**	-.22*	-.21*	-.35**	-.18	-.21*	-.04	-.15	-.04	-.23*	.02		-.07	-.08	-.12

* $p<.05$ ** $p<.01$

得点と chumchecklist 得点との相関値だけがほぼ一
致しているが、他の相関値は大きな相違があることが
明らかにされた。このことから、前思春期において高
校時を展望した内容と実際に高校時を迎えて前思春期
の chum 形成のあり方と現在の青年期のあり方とを関
連づけた内容とは異なるものであることがとらえられ
た。

(3)中年期からとらえた前思春期、青年期、中年期の 自我発達の関連

前思春期の chum の有無と青年期の自我発達上の危
機状態との関連をとらえるために、TABLE 2 の中年期
女性の小学6年生時を回顧した chumchecklist 得点
と高校時を回顧した自我発達上の危機状態得点との相
関値を算出した。その結果、両得点間に有意な相関は
認められなかった (chumchecklist 得点と危機状態得点; $r=-$
.05, $n.s,$ chumchecklist 得点と A 水準得点; $r=-.20, n.s,$ chum-
checklist 得点と B 水準得点; $r=.13, n.s$)。しかし、小学6年
生時を回顧した chumchecklist 得点と高校時を回顧
した自我発達上の危機状態各下位項目得点との相関値
を算出したところ、chumchecklist 得点と危機状態A
水準項目の「実行力欠如」得点との間で有意な負の相
関($r=-.25, p<.05$)が認められた。その他の下位項目得点
との間では有意な相関は認められなかった。このこと
から、中年期女性に前思春期と青年期とを回顧させて
両時期の関連を見た場合、前思春期において chum 形
成が果たされなかったことと無気力で実行力のない青
年期を過ごしたこととを関連づける傾向が明らかにさ
れた。

次に前思春期の chum の有無と中年期の危機状態⁷

⁶ 中学、高校、大学生による小学6年生時を回顧した chum-
checklist 得点平均値をもとに学年差を検定したところ、学年
差があり ($F(2,161)=6.71, p<.01$)、中学生が他の学年よりも
高いことが明らかになった。

⁷ 専業主婦群と有職者群との中年期の危機状態得点の平均値の
差の検定を行った結果、専業主婦群のほうが有職者群よりも危
機状態得点が高いことが明らかにされた ($t=6.18, df=61, p$
 $<.01$)。この結果は、堀内 (1993) の中年期女性の自我同一性の
変化や認識のし方の研究結果と同様であった。

との関連をとらえるために、TABLE 2 の中年期女性の小学 6 年生時を回顧した chumchecklist 得点と中年期の危機状態得点との相関値を算出した。その結果、両得点間に有意な相関は認められなかった(chumchecklist 得点と中年期危機状態得点; $r = -.07$, n.s.)。また、小学校 6 年生時を回顧した chumchecklist 得点と中年期の危機状態各下位項目得点との相関値の結果からも有意なものとは認められなかった。さらに中年期女性の専業主婦群と有職者群別に小学 6 年生時を回顧した chumchecklist 得点と中年期の危機状態得点との相関値を算出したところ、両群とも有意な相関は認められなかった。しかし、専業主婦群の場合、chumchecklist 得点と中年期の危機状態尺度の「死の不安」得点とで($r = -.59$, $p < .01$)、また「過去の執着と分離不安」得点とで($r = -.48$, $p < .05$)それぞれ負の相関が認められた。このことから、専業主婦の中年期の死に対する不安感や過去への執着と親との分離不安は、前思春期において chum 形成が果たされなかったことと関連していることが示唆された。このことを一般化してとらえていくには、さらに専業主婦の調査対象を増やして明らかにしていく必要があると思われる。

さらに青年期の自我発達上の危機状態と中年期の危機状態との関連をとらえるために、TABLE 2 の中年期女性の高校時を回顧した自我発達上の危機状態各下位項目得点と中年期の危機状態各下位項目得点との相関値を算出した。その結果、青年期の「決断力の欠如」は、中年期の「新しい生き方の模索」と($r = .30$, $p < .05$)、また青年期の「親からの独立と依存のアンビバレンス」は、中年期の「死の不安」($r = .28$, $p < .05$)や「時間不信」($r = .28$, $p < .05$)とで有意な正の相関が認められた。また、青年期の「身体的疲労感」は、中年期の「過去の執着と分離不安」($r = -.25$, $p < .05$)とで負の相関が認められた。このことから、青年期の決断力の欠如は中年期の生き方の模索まで影響を及ぼすこと、青年期の親子関係上の葛藤は中年期の死に対する不安や時間に対する不信感と関連をもつこと、および中年期の過去の執着と親からの分離不安は青年期に身体的充足感があったことと関連をもつことが示唆された。

(4)前思春期と中年期からとらえた青年期の自我発達上の危機状態の相違

小学生女子によって展望された高校時の自我発達上の危機状態得点と中年期女性によって回顧された高校時の自我発達上の危機状態得点とをもとに主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転させた結果は TABLE 7 のとおりであった。固有値 2.0 以上で 1 つの

TABLE 7 青年期の自我発達上の危機状態因子分析結果

因子名	項目内容	1	2	3	4	5	h^2
自己愛的 世界への 没入	8 いつも緊張してイライラしていた。	.76	-.02	-.09	.11	-.02	.60
	9 憂うつな高校時代だった。	.56	.17	.18	-.01	.27	.45
	13 疲れやすい高校時代だった。	.49	.25	-.06	.10	.13	.34
	14 人の目が気になる高校生だった。	.60	.20	.24	-.29	-.12	.56
	18 ひとりで考えこむことが多かった。	.55	-.06	.44	.10	-.04	.52
	19 何でも行こうがめんどうだった。	.56	.14	-.03	.12	.53	.64
	22 時々、たまらなく家出をしたかった。	.44	.32	.17	.04	-.11	.34
	23 つまらないことでクヨクヨ悩んだ。	.52	.13	.34	.24	.13	.47
	26 学校へ行きたくなかった。	.67	.20	.10	.18	.34	.65
身体的 異和感	2 クラスで仲間はずれにされていた。	.33	.40	-.03	-.02	.33	.38
	4 うちとけて話せる友人がいなかった。	.11	.57	-.14	.05	.12	.38
	10 心臓や胸の痛みを感じていた。	.22	.67	.13	-.11	.05	.54
	⑩ 食欲のある高校時代だった。	-.10	.54	.22	.41	-.23	.58
	24 体のどこかが痛いことがよくあった。	.21	.65	.07	.01	.27	.55
	25 非常に不思議な体験をした。	.19	.44	-.08	-.01	.43	.42
親からの 独立と依 存のアン ビバレン ス	1 就職や進学のことと十分悩んだ。	-.05	.20	.35	-.20	.30	.29
	6 困った時に親に気持ちをわかってもらいたい反面、ひとりで考えこんでいた。	.08	.14	.67	.01	-.07	.48
	7 決心がつきにくい時に親に聞きたい反面、自分で解決したかった。	-.03	-.38	.58	-.07	.08	.50
	15 高校時代は決断力がなかった。	.02	.24	.45	.21	.20	.35
	20 親とは何でも話したい反面、話したくない気持ちもあった。	.04	.37	.45	.06	-.06	.35
	21 親のいうことや考えることは正しいと信じる反面、疑問をもっていた。	.21	-.15	.52	.10	-.04	.35
充実感 の欠如	③ 高校生活は、イキイキしていた。	.40	-.11	-.16	.72	.01	.72
	⑤ 高校時代は、何事も集中できていた。	-.03	-.04	.07	.72	.17	.55
	⑩ 学校には毎日イキイキしてかよった。	.15	.32	.12	.70	-.10	.64
	⑪ 高校時代は自信にあふれていた。	.05	-.03	.41	.56	-.24	.54
理想自己 の葛藤	16 理想の自分がたくさんあって本当の自分を見つけられなかった。	.19	-.07	.38	.19	.41	.39
	27 朝、起きにくく遅刻や欠席が多かった。	.17	.14	.10	.01	.71	.56
	② 人からからかわれても平気だった。	.27	-.01	.24	.19	.46	.38

注：小学生の場合は、項目内容を展望法の文に変えて作成した。

○項目は、方向を逆転して得点化した項目を示す。

因子にのみ絶対値 .30 以上の負荷を有することを条件に因子を抽出した結果、5 因子が抽出できた。各因子の命名は、項目内容を解釈して行った。この因子をもとに前思春期女子が展望する青年期の自我発達上の危機状態と中年期女性が回顧する青年期の自我発達上の危機状態との相違を明らかにするために、小学生群と

中年期群間で各因子の平均値の差の検定を行った。その結果、第1因子の「自己愛的世界への没入」($t=3.99$, $df=137$, $p<.01$)と第2因子の「身体的異和感」($t=6.64$, $df=137$, $p<.01$)において、前思春期女子群のほうが中年期女性群よりも得点が高いことが明らかにされた。また、第5因子の「理想自己の葛藤」においても前思春期女子群のほうが中年期女性群よりも得点が高い傾向が認められた($t=1.92$, $df=137$, $p<.10$)。しかし、第3因子「親からの独立と依存のアンビバレンス」($t=1.60$, $df=137$, $n.s$)と第4因子「充実感の欠如」($t=1.35$, $df=137$, $n.s$)は両群に差は認められなかった。このことから、「青年期」のイメージに関して、前思春期女子のほうが中年期女性よりも否定的であり、自分だけの世界に引きこもり、様々な身体的な不調が生じたり、理想の自分が容易には実現されないのではないかという不安を強く抱いていることが明らかにされた。

(5)総合的考察

本研究の結果を総括すれば、FIGURE 1 のように図示できる。FIGURE 1 から、Sullivan (1953) のいう前思春期における chum 形成の青年期以後の影響力は、前思春期の親密動機の強さの程度よりも chum があるか否かのほうが強いことが明らかになった。この前思春期の chum の有無は、展望法と回顧法を用いた尺度の相関値から、中年期の危機状態よりも青年期の自我発達

上の危機状態に強く影響を及ぼすことが明らかにされた。このことから、Sullivan(1953)の前思春期の chum 形成が青年期の自我発達まで影響を及ぼすという知見や Bolognini, et al. (1989) の前思春期の精神的健康度が青年期まで継続するという結果が支持できた。しかし、Hightower (1990) の前思春期の精神的健康度や対人関係パターンが中年期まで影響するという結果や Deutsch(1944)の前思春期における自律性が中年期まで継続するという知見は専業主婦群のみに支持できたが、有職の中年期女性の場合には支持されなかった。

また、青年期の自我発達上の危機状態と中年期の危機状態との関連について、FIGURE 1 に示す各下位項目間で有意な相関があることから、King (1980) の中年期の葛藤は青年期の葛藤を再現しやすいという知見や岡本 (1985) の中年期の自我同一性の葛藤は青年期のそれと関連があるという結果が支持できた。とくに FIGURE 1 の相関内容を見ていくと青年期の決断力の欠如や親子関係上の葛藤、あるいは身体的疲労感、有職か専業主婦かにかかわらず中年期の危機状態内容に影響を及ぼすことが明らかにされた。

しかし、本研究の結果では2つの矛盾が示された。まず、前思春期の chum の有無と青年期の自我発達上の危機状態との関連について、小学生を対象とした展望法を用いた場合にはchumの有無は危機状態尺度の

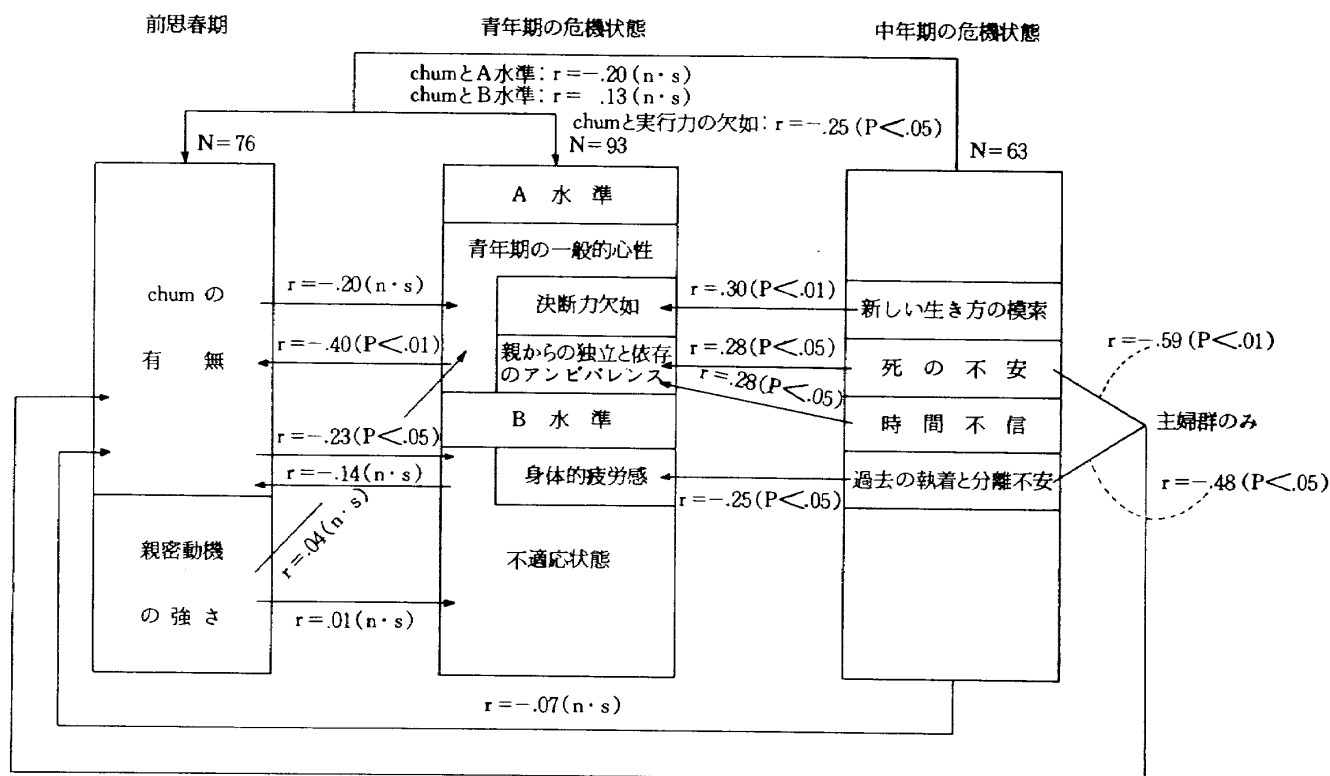


FIGURE 1 前思春期の chum 形成、青年期の自我発達上の危機状態、中年期の危機状態の関連

B水準得点とで相関を示し、高校生を対象とした回顧法を用いた場合にはchumの有無は危機状態尺度のA水準得点とで相関を示すという矛盾が示されている。この矛盾について、回顧法の結果を重視すれば、前思春期のchumの有無は、実際は青年期の自我発達上の危機状態のA水準内容（とくに親子関係上の葛藤や自我同一性の確立の葛藤）に影響を及ぼすと考えられ、小学生に対して青年期を展望させた結果、小学生による「青年期」に対するイメージが青年期の不適応状態の恐れという結果で反映されているととらえられる。このことは、青年期の自我発達上の危機状態に対して小学生女子と中年期女性とのとらえ方の相違内容の結果からもうらづけられる。さらにもう1つの矛盾点として、中年期から回顧した前思春期のchumの有無と青年期の自我発達上の危機状態との関連については有意な相関はないが、小学生を対象とした展望法にもとづく相関値や、高校生を対象とした回顧法にもとづく相関値では有意な結果が示されていることである。この矛盾について、中年期の被験者を対象として前思春期と青年期の2つの時期を回顧させているために時間経過上の諸要因が結果に介入しているのではないかととらえられる。長い時間を経た後の回顧法結果の信頼性の問題が考えられる。

要約と今後の課題

本研究は、以下のとおりに要約される。

(1)前思春期における女子のchum形成に関して親密動機の強さの程度よりもchumが存在するか否かのほうが以後の自我発達に影響を及ぼすことが明らかにされた。

(2)前思春期女子のchumの有無は、中年期の危機状態よりも青年期の自我発達上の危機状態に強く影響を及ぼすことが明らかにされた。

(3)青年期女子の自我発達上の危機状態は、中年期の危機状態内容に影響を及ぼすことが明らかにされた。

(4)青年期の自我発達上の危機状態に関して小学生女子に展望させた内容と中年期女性に回顧させた内容とを比較した結果、小学生女子のほうが中年期女性よりも青年期の危機状態への恐れ、とくに自己愛的世界への没入や身体的不調の恐れが強いことが明らかにされた。

しかしながら、本研究の問題点は多く残されている。たとえば、(1)前思春期のchum形成に関して、具体的にchum形成上のどのような要因が自我発達上の危機状態に影響を及ぼすのかが明らかにされていない。と

くに本研究結果からchum形成の学校環境や地域による差が明らかにされている。この点を参考にして今後は、学校環境や地域のどのような点が、chum形成を促しているのか、またchum形成上の何が自我発達に重要であるのかを明らかにしていく必要がある。(2)中年期の危機状態に関して、専業主婦と有職者とによってその危機状態に差があり、とくに専業主婦の場合、前思春期のchumの有無は、中年期の危機状態内容にも影響を及ぼしている点が明らかになった。この点に関して、今後は、女性にとって職業をもつということは、人生上の自我発達にどのような影響を及ぼしているのかをさらに対象を増やして明らかにしていく必要がある。(3)本研究の方法として、展望法と回顧法を用いて前思春期、青年期、中年期の自我発達をとらえたが、これらの方法の信頼性の問題が残される。本研究の結果を一般化していくには、縦断的研究法を用いて検証していく必要があると思われる。

引用文献

- Bolognini, M., Bettschart, W., Plancherel, B., & Rossier, L. 1989 From the child to the young adult : Sex differences in the antecedents of psychological problems. *Social Psychiatry & Psychiatric Epidemiology*, **24**, 179—186.
- Deutsch, H. 1944 *Psychology of women*. I. New York : Grune & Stratton.
- Erikson, E.H. 1956 Identity and the life cycle. *Psychological Issues*, **1**, 1—171.
- Gjerde, P.F., & Block, J. 1991 Preadolescent antecedents of depressive symptomatology at age 18. *Journal of Youth and Adolescence*, **20**, 217—232.
- Hightower, E. 1990 Adolescent interpersonal and familial precursors of positive mental health at midlife. *Journal of Youth and Adolescence*, **19**, 257—275.
- 堀内和美 1993 中年期女性が報告する自我同一性の変化 教育心理学研究, **41**, 11—21.
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知II 教育心理学研究, **20**, 48—58.
- King, P. 1980 The life cycle as indicated by the nature of the transference in the psychoanalysis of the middle-aged and elderly. *International Journal of Psychoanalysis*, **61**, 153—162.
- Mannarino, A.P. 1976 Friendship patterns and

- altruistic behavior in preadolescent males. *Developmental Psychology*, **12**, 555—556.
- McAdams, D. P. 1980 A thematic coding system for the intimacy motive. *Journal of Research in Personality*, **14**, 413—432.
- McAdams, D.P., & Constanian, C.A. 1983 Intimacy and affiliation motives in daily living. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 851—861.
- 村山久美子 1987 女性心理学入門 誠信書房
- 長尾 博 1987 前思春期に多彩な症状を示した児童の遊戯療法過程 季刊精神療法, **13**, 361—371.
- 長尾 博 1989 青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み 教育心理学研究, **37**, 71—77.
- 長尾 博 1990 アルコール依存症者と健常者との中年期の危機状態の比較 精神医学, **32**, 1325—1331.
- Sullivan, H.S. 1953 *The interpersonal theory of psychiatry*. New York : Norton.
- 岡本 裕子 1985 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, **33**, 295—306.
- Vaillant, G.E., & Milofsky, E. 1980 Natural history of male psychological health : Empirical evidence for Erikson's model of the life cycle. *American Journal of Psychiatry*, **137**, 1348—1359.

謝 辞

本研究を実施するに当たってご協力いただきました長崎県の小学校、中学校、高校およびボランティア活動をしている方々に深謝致します。

(1995.3.13 受稿, '96.12.20 受理)